

金城清子 著

家族という関係



岩波新書

305



金城清子 著

家族という関係

岩波新書

305

金城清子

1938年東京に生まれる

1961年東京大学法学部卒業

専攻—国際法, 法女性学

現在—東京家政大学教授, 弁護士

著書—「法女性学のすすめ—女性からの法律への問

いかけ—」(有斐閣選書)

「国籍を考える」(共著, 時事通信社)

家族という関係

岩波新書(黄版) 305

1985年6月20日 第1刷発行 ©

1985年9月25日 第2刷発行

定価 480 円

著 者 きん じょう きよ こ
金 城 清 子

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・製本 法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

まえがき

フロイトはかつて、一九三〇年に書かれた「文化への不満」のなかで、家族の未来をつぎのように予言しました。

文化がすすんでいくにしたがつて、家族と社会とのあいだに対立が生まれてくる。まず若者にとつて「家族の緊縛きんばくを脱することが一つの課題となる」。ついで男たちが「夫として、また父親としての任務から遠ざかる」。女たちは、文化に対して敵意をもち「この文化の潮流を押しとどめ、その進行のテンポをゆるくする役割を演じはじめる」と。

そしてフロイトは、その先に、やがて女たちも家の外に目を向けるようになり、家族はぬけがらになってしまふであろうことを暗示しています。

いま生きていたら、フロイトは、つぎのような一言をつけくわえるのではないでしょうか。

「科学技術の発展によつてもたらされた荒寥こうりょうとした世界、そこで疲れきった人びとは、愛をもとめてふたたび家族への回帰をはじめている」と。

「喜びは分かちあえば二倍になる、悲しみは分かちあえば半分になる」といわれます。現代社会で家族は、非人間的な制度や、個人の力では制御できない企業、国家、そして急激に変化していく社会のなかで危機に瀕している個人としてのアイデンティティを守ってくれる場です。そして家族は、息苦しい管理社会の歯車の一つとされている人びとに、人間らしさを提供し、人間のエコロジカルな存在をささえる重要な場でもあります。

戦後の日本では、家族が理想的なものとなっていないのは、戦前からの古い伝統が残っているからであるとして、「家」制度の克服、家族の近代化というように、家族問題の原因が過去に求められました。これらは現代でも一定の有効性はもっているものの、現代家族がかかえている問題を直截に解くものではなくってしまいました。それは当時とは全く異なる社会状況が進行し、ますます加速度をつけながら、社会が変化していきつつあるからです。

私たちをとりまく社会環境は、いま想像をはるかに越えるような激動を迎えようとしています。そしてその前兆はいたるところではじまっています。その反映の一つが現代の家族問題だといえましょう。その意味で、現代の家族問題は、未来からやってきているといえるかもしれ

ません。したがって私たちは、これからの社会の動向をふまえて、家族の問題を考えていく必要があるでしょう。

かつてはさまざまな機能をもち、人びとの生活を丸がかえしていた家族は、つぎつぎにその機能を奪われてきました。家族の機能は構成員のパーソナリティーの安定化、子供の社会化の二つに縮小されてしまいました。そしてこの二つの機能は、現在、家族がもっともよく果せるものであるとともに、人類はそのオルターナティブをみつけることができないでいます。そうであるならば、人間にとって不可欠なものとして家族は、これからも存在しつづけるでしょう。そして私たちは、家族がこれらの機能を十分に果していくことができるよう、あらゆる努力をはらっていかねばなりません。

本書では、家族の変遷を跡づけながら、私たちがいま遭遇している社会変化のなかでの家族の状況をふまえて、これからの家族のあり方を、法制度を中心に考えてみたいと思います。

目

次



まえがき

I	いま、家族は	1
---	--------	---

1	歴史的に変化してきた家族の形態	2
2	家族と女性の地位	9
3	日本の家族の特殊性	35
4	進行する人間阻害	45

II	夫婦という関係	57
----	---------	----

1	今日の結婚観	58
2	婚姻の成立	66
3	夫婦の法律関係	76
4	夫婦の人間関係	92
5	離婚をめぐる	103

Ⅲ 親子という関係	115
1 ファミリースタイルの選択	116
2 出生と父母の結婚	132
3 子供の養育	139
4 老親との関係	158
Ⅳ 新しい家族像を求めて	171
1 男と女のかかわり方——性による分業の変革	172
2 これからの家族政策	181
3 家族を社会変革の核として	190
あとがき	203

I いま、 家族は



1 歴史的に変化してきた家族の形態

小家族は、家族の基本形態

家族の問題について語られるとき、いつも出てくるひとつの論点があります。それは戦後の日本で、「家」制度が廃止されたことや家族の形態が小家族化したことが、高齢者問題をはじめとした、さまざまな家族問題の原因であるという見方です。そして、大家族の良さが強調され、その形態こそが家族の本来のあり方であるという主張されてきました。

たしかに小家族は個人をささえる集団としては脆弱ぜいじやくなものです。しかし、核家族こそ人類が形成してきた集団の基本をなすものなのです。

人類はひとりびとりが孤立してではなく、集団として生存してきました。集団の形態はさまざまなに変化してきました。かつては、原始時代には人びとは氏族という大きな集団をなしていて、その後、大家族となり、さらに小家族へと進化してきたと考えられていました。しかし文化人類学・歴史人口学などによって、過去の家族に関するイメージは誤りであることが明ら

かにされてきました。長いあいだ文明の発展から取り残されてきた人びとの社会を、人類学者たちが調査した結果によると、未開民族のほとんどすべてにおいて、男女と子供からなる小家族が基本となっていて、しかも統計的にみて、いずれの社会でも核家族が大多数をしめてきたことが明らかになっています。大家族は、ある程度高度な文明を発達させた社会でみられる歴史的な形態で、しかも裕福な人びとのあいだで形成されてきたものなのです。

しかし大家族は、家族のあるべき姿として人びとの憧れをさそってきたことも事実です。

武陵桃源の世界として

津口元徳は、「奥州漁民の生活」という報告のなかで、明治三〇年代の大家族の生活をつぎのようにつたえています。

「家族は、両夫婦と、寡婦^{かふ}一名、子供六名、下婢^{かひ}一名、以上一二名の大家族にして、皆いずれも、分業的にその職務に勤勉なる、とうてい都人士女の想像及ぶところにあらず。

老主は、区長の職務のほか、つねに網すきに余念なく、船の出入かならず手伝いにでて、若主人は、漁のため、雨の日も風の夕も船にてその日を送り、その長男は、『かつお』漁のため他家の船に同乗し、数十日間よそにありて家門に帰りくることまれなり。

老婦はうちにありて留守居をし、若婦は、その寡婦および下婢らと早朝馬をひいて草刈にいで、朝飯を喫してふたたび畑に出ずるや、月を踏んで帰るの状たり。

そばに泣く幼児には、長女がこれを守りたり、三、四歳の男の子はつねにその長の保護を受けつ、海岸に遊泳し、夕日海上に錦繡きんしゅうを織るの頃、一同帰りきたりて食卓につくをつねとす。

夕方にとり家族だんらんすればとて、べつにめずらしき談話をなすにもあらず、またことさらに快活なるにもあられども、この一大家族は、一の怨言もなく、一の不平もなく、嫉妬しとと猜忌さいぎもあらざれば、憤怨叱咤ふんえんしつたの声をも聞かず、終日えいせいその任務を果たし……旅順、浦塩、あるは遼陽方面の戦報を聞き、あるいは村内の壮丁そうてい出征後の状など語りつつ、和氣靄然あいぜんたるの状、じつに武陵桃源とは、かかるありさまぞと感嘆おくあたわざるなり」(『女学世界』四卷九号、一九〇四年)

生産の場としての家族

津口元徳が紹介している家族では、ひとりびとりの家族員が、それぞれの性、年齢、体力に応じて、家族のなかでの役割を果し、それによって一家の生活がとどこおりなくいとなまれています。家族員の分業によって生産がおこなわれていたのです。日本でも産業化以前の社会では、人びとが生存していくために必要な生産が、家族を単位としていとなまれています。

したがって家族という集団は、人類の生存のために不可欠なものでした。そして個人は経済的に家族に依存して生存を確保してきました。経済的依存こそが家族を安定化し、強固なものとして存在させてきたものです。

しかし家族は、かならずしも人びとに幸せな生活や子供にとって好ましい養育環境だけを提供したわけではありません。ときに大家族は、個人にとって耐えがたい抑圧の根源でもありました。とくに年少者や女性は、服従性がよく求められ、忍従の生活を強いられることが少なくなかったのですが、それでも家族をはなれては生存が不可能であった以上、家族は、はなはだ強固なものとして存在していたのです。

産業化社会と家族

いわゆる産業革命によって、しだいに生産の場が家族をはなれ、家族内の分業が、社会的な分業にとってかわられるようになる、家族の形態も、家族のなかでの分業の形態も、それまでとは、著しく異なったものになってきます。

まず大家族は、その存在理由を失って解体の方向に向かいます。老いも、若きも、幼いものも、それぞれの能力に応じて生産に従事する必要がなくなってくるからです。しかも、産業化社会では、家族は、働く場を求めてそれまで生活の基盤のあった農村や漁村をはなれて、都市

へ移り住まなくてはなりません。そのためには機動性の高い小家族が都合のよい家族形態となりました。家族は、生産の場としての機能を喪失させて、消費ないし扶養の場、共同生活の場にすぎないものになりました。そして、このような家族にとって、それを一体として機能させてきたのは、「男性は、働いて家族の家計をささえ、女性は、家事・育児を担当して家庭を守る」という性による分業を基礎とした男女の相互依存でした。男性も、女性も、互いの家事処理能力や経済力に依存してはじめてその生存が可能だったのです。

この時代にも、仮に家庭に不満をもったとしても、家庭をはなれることは並大抵のことではありませんでした。とくに働く場のなかった女性にとっては、生存をかけたことでした。

イプセンは、戯曲『人形の家』で自我にめざめた女性の姿を描いています。夫の愛情が自分を人間として尊重しているのではなく、人形をかわいがるようなものにすぎなかったことを知って、ノラは、人間として生きていくことをめざして、扉をパタンと閉めて家を出ていきました。しかし、イプセンは、家出をしたノラがその後どうなったかを、まったく語ろうとしません。家を出たノラはどのような生活を立てていったのでしょうか。

魯迅は、「ノラが生きていくためには、売春をするか、いやでも夫の家に帰るほかなかったのだ」といっています。イプセンの描いたノラが詩だったとしたら、魯迅のいうノラの境涯こ

それが現実だったというほかありません。結婚や家庭は、女性にとっては、唯一の生存を保障してくれるものでした。

性による分業を基礎とした男女の相互依存こそが、社会の基礎的単位としての家族の存続をささえてきたものなのです。ここでも、生きていくためには、家族の一員であることが必要不可欠でした。

相互依存から精神的な結合へ

基本的には、科学技術の進展がこのような社会環境を徐々に変化させてきました。今日では産業の高度化によって女性の働く場もふえてきました。社会保障制度も社会が豊かになってくるにしたがって、しだいにととのえられてきました。サービス産業が発達し、男性は生活していくために、かならずしも妻の家事処理能力にたよらなくてもよいようになりました。女性も、経済的に自立していくことがかならずしも不可能ではなくなりつつあります。性による分業の必然性がしだいに変化し、家族が人びとの生存のための場ではなくなりつつあるのです。そして家族員や男女相互の依存の必然性がなくなってくることは、個の自立・独立をうながすことになり、そのことが家族の結びつきを弱めるという結果をもたらします。

スーザン・ブロッカーは「もともと、経済・社会的手段だった結婚に恋愛というロマンチック

クな概念を持ちこんだのが西欧の家庭危機の遠因であった」といっています。しかし、この考え方は、原因と結果とをとりちがえているといえましょう。たしかにかつて家族は、人びとが生存していくために不可欠な制度でした。そして結婚は、男女にとって経済的・社会的手段でした。しかし家族が、かならずしも生存のために欠かすことのできないものではなくなくなったとき、愛や協力、思いやりというものだけが、家族をつなぎとめる唯一のきずなとして残ったのです。これからの家族は、男女の愛、親子の愛と責任という、とても壊れやすいもののうえに築いていかなければならないものであるだけに、不安定であることは免れません。今日離婚の増加など家族の崩壊と称されている現象は、ある意味では、家族の担う機能の変化にとまなう必然的なものといえましょう。

このことが、新たな家族の問題を生み出すことになりました。今日の家族問題について考えるまえに、かつてはどうであったかを、主として女性に視点をあてながら見てみたいと思います。